
DEATH NOTE ~parallel world~

闇狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEATH NOTE ｝parallel world｝

【Nコード】

N9406C

【作者名】

闇狼

【あらすじ】

新世界の神“キラ”と世界一の名探偵“L”の対決に興味を示す女性がいた。その名は、“S”。神vs探偵vs殺し屋の三つ巴の対決 果たして、どんな結末が待っているのか

page 零（前書き）

これはただの自己満足小説です！
読まれるかどうかは任意でお願いします。

時は現代。

“キラ”の支配に全世界が怯えている現代。

最近現れた“キラ”は世界中の犯罪者を次々と裁き、世界を恐怖に陥れた。

その大胆不敵な裁きに政府や警察は手を出せなかった。

しかし、“L”と呼ばれる世界一の探偵が立ち上がり、キラVS Lの壮絶な戦いが始まった。

そんな中、また別に立ち上がる一人の女性がいた。

その女性の名は

“ S ”

ここは東京都内にあるマンションの最上階の一室だ。

最上階なだけに半端なく広く、内装も豪華だ。窓からは朝方なのか、朝日がうつすら見えている。

そんな中、一人の女性がリビングルームの机のノートパソコンに向かっていた。

その女性は日本人特有の、いや、日本人以上に美しい漆黒の滑らかな髪に濡れた黒い瞳、小ぶりの鼻に真っ赤な唇。まさに大和撫子といてもいいほどの美しい女性だった。

カタカタカタ…

その女性はカタカタとキーボードを打ちながらコーヒーを口に運んだ。

その時、メールの着信を知らせる音がノートパソコンからした。

女性はキーボードを打つ手を止め、マウスを握ってメールを開いた。

Dear: シエリー

任務だ。

相手は高橋此守。

一週間以内に始末しろ。

From: MDS

女性はそのメールを見て溜息をついた。

「また殺しか…」

どうやら女性の元に来たメールは殺しの依頼らしい。

と、いうことはこの女性は殺し屋なのだろうか。しかし、メールが命令口調なことから彼女には主というものがいるらしい。

組織的な殺し屋集団のようなものだろうか。

女性はコーヒークップを持って立ち上がり、台所へ向かってそれを流しに置くとそのまま寝室へ向かった。

「はあ…MDSの奴らも無理な注文するわね…次から次へと…」

おそらく彼女はついさっき帰ってきたばかりなのだろう。

……殺しの仕事から。

女性はベッドに倒れこむとそのまま眠りについた。

真っ暗な、闇

ここは、どこだろう

闇

闇

闇

闇

闇

闇闇闇闇闇

光がない

光なんて見えない

光なんて

女性は重い瞼を開けた。

「…頭痛い」

女性は頭を押さえながらズボンに入ったままになつてた携帯を取り出した。

携帯は午後8時を示していた。そういえば部屋が真つ暗だ。よほど疲れていたのだろう。12時間以上眠っていたのだ。

女性は溜息をつくとふらふらとリビングに向かい、電気を付けてソファーに深く腰掛けた。

ソファーの上に放られていたりモコンを手に取り、適当にボタンを

押した。

するとテレビにニュースキャスターの男性が現れた。

『では、次のニュースです。本日の午後4時頃、東南アジアで根を張っていたMDSという犯罪組織が壊滅しました。』

女性はその言葉を聞いて顔を強張らせた。

MDSといえば彼女のメールの中にあつた言葉だ。やはり彼女の属している組織なのだろう。それが壊滅したということなのだろうか。

『MDSのボスである中国人の王金魁を含む主要メンバー数名が心臓麻痺により死亡したとICPOは述べています。心臓麻痺という死因からこれは“キラ”による裁きだと思われます。』

女性は目を見開いた。

王…確かにMDSのボスの名前だわ。

どうやら、本当に壊滅したみたいね…

…と、いうことは仕事はナシ、かしらね。

女性は考えるように口に手をやった。

「…面白いじゃない。……キラ、か。」

女性はペロツと唇を一舐めするとニヤリと笑った。
それは、背筋が凍るほどの笑みだった。

「キラ……ふふ、面白くなりそう。」

女性は立ち上がり、シャワーを浴びるべく浴室へ向かった。

「キラは最近現れた大量殺人鬼であり 世界中の警察、そして
世界一の探偵“L”が立ち上がった…」

女性はノートパソコンのキラに関するホームページに目を通して
いた。

「L…キラ…」

女性は何かを考えているように口に手をやった。そして、ふっと笑
った。

「面白いじゃない。」

女性は怪しげな笑みを浮かべて目の前のパソコンに見入った。

「キラ、L…：なら、私は“S”と名乗りましょうか…」

女性はそう言っただけでキラに関する掲示板に打ち込んだ。

name：名無しさん

私の名前は“S”。

キラに賛同する人間であり、反対する人間でもある。

また、Lに賛同する人間であり、反対する人間でもある。

そして、キラとLの敵でもある。
私はS。

女性　これからSと呼ぶべきか　は、不敵に微笑んでその書き込みを眺めた。

　　Lやキラのような天才ならばこの書き込みにはすぐに気づくでしょうね……

Sはパソコンをシャットダウンした。
そしてコーヒーを淹れ、ソファーに腰を落ち着かせた。

　　キラやL……会ってみたいわね。
二人の対決、この目で見てみたいわ。退屈しのぎにはなるでしょうし……それに、私を縛っていた組織も壊滅したからやることもなくなつた……

二人に会うには……

………

Sはコーヒーを一口飲んだ。

　　Lに接触した方がいいわね。

Sは真剣な顔つきに変わり、思案に暮れ始めた。

L……世界一の探偵であり、全世界の警察を動かせる……
こんなものからじゃあ接触できないわね……

…確かLにはワタリという有能な助手がいたわね…
ワタリ……

Sはコーヒーを持ったまま立ち上がり、再びノートパソコンを開いてインターネットを起動した。

ワタリ…L同様、ファイルはない…

が、Lという世界一の天才を支えられるほどの人間は少ないはず。

Lは探偵。探偵という仕事は様々な情報が必要になる。その様々な情報を一遍に集めるには…

相当のプログラミング能力、そしてそのプログラムに耐えられるだけの機械を発明する力…

……もし、ワタリが本当は複数の人間で構成されているとしたら能力はあまり関係ない……けど、Lは世界一の探偵。

命を狙われやすい立場にいることから、何人も側に置くわけにはいかない！だからワタリは単独だと考えた方がいいだろう……

まあ、もつとも、Lが複数だったらその考えはバアだが…それはないだろう。複数ならば自分の素性を隠す必要はない。
いくらでも替えがきくのだから……

Sはカタカタとキーボードを打った。

ワタリ……L……

…ワタリ……？

プログラミング能力……発明……

…！

Sは何かを思い出したかのようにカタカタとキーボードを打った。

「……！」

Sの瞳が驚愕に見開かれ、そして確信へ変わった。

「キルシュ・ワイミー……」

Sは不敵に笑った。

キルシュ・ワイミー……ワタリ。

……絶対とは言えないけれど……ワタリは彼ね。
世界一の発明家……Lにはぴったりだわ。

Sはまたカタカタとキーボードを打った。

今、Ｌはおそらく東京にいるわ。

キラが日本にいて、さらに関東周辺にいると推理したから……
キラを捕まえるなら日本にいないければならない。……さらに、おそらく警視庁の近辺にいるでしょう。

ここ最近キラは警察の情報を使って裁きをしている。……ここからＬは警察を疑うでしょう。そして、本当に信頼できる人材を選ぶために……警視庁周辺にＬはいる！

Ｓはカタカタとキーボードを打つと携帯を取りだしてダイヤルし始めた。

「……」

『はい、こちらニッセイホテルでございます。ご予約ですか？』

「いえ、そちらに最近外国人の老人が泊まっていますか？老人でなくても黒ずくめなど、怪しい人物は……」

『いえ、そのような人は……』

「そうですか。」

Ｓはそう言つと携帯を切り、またダイヤルし始めた。

警視庁周辺のホテルにＬは必ずいる。

とりあえずキルシュ・ワイミーをキーワードに虱潰しに聞くしかない……

『はい、こちら青春ホテルでございます

』

その頃

警視庁の近くのとあるホテルの一室に、一人の老人が現れた。

「竜崎」

「はい？」

老人　キルシュ・ワイミーことワタリは椅子に体育座りに座ってドーナツを食べている男性に話しかけた。
ワタリの方は柔らかな雰囲気を持っており、おじいちゃんという感じが、男性はワタリと正反对で、野生児という感じがする。ギョロリとした目の下に隈があり、黒い髪は伸び放題でボサボサ、服も皺だらけだった。

「これを」

ワタリは男性にノートパソコンを見せた。

男性は親指を噛みながらそれを見た。

私の名前は“S”

そう、それはSが書き込んだものだった。

「これは……」

男性は目を見開いた。

「竜崎……これはただの悪戯でしょうか……？」

「……いや、悪戯にしては真に迫りすぎている。キラと私への挑戦……にもとれますが、これだけじゃあ分かりません。」

ワタリ、これからそのSという人物に注目しておいてください。」

「はい。」

ワタリは一礼するとそこから去っていった。

男性は “L” は書き込みをじっと見つめた。

「S、ですか……」

『ああ、そのような人ならば我がホテルの隣にあるホテルに出入りするのを見かけました。』

どうやらホテルを貸しきりにしたようで。』

「……………！そうですか。実は私の祖父でして。すみません、ありがとうございます。」

Sは携帯を切って不敵に笑った。

見つけた。

貸しきりというのはちょっと想定してなかったけど……まあ、結果才
ーライね。

Sは以外と抜けているところがあるのだろうか……世界一の探偵ならば金も相当な額を持っているはずだから貸切くらい想定するべきだろう。まあ、それはSの性格なのだろう。

Sは立ち上がるとベランダに出た。

きれいな夜景が広がっている。

「……………明日、お邪魔するわ。」

ここは警視庁前の通り。

ここにSはいた。

上は長袖のぶかぶかな男物の白いTシャツ、下はジーパンというラフな格好をしていた。

…とてもこれからLに会いに行く格好には見えない。

Sは通りのベンチに腰掛けて通りの様子を眺めていた。

警視庁の真正面のあのホテル、か……

L……あなたはおそらく……いえ、きっとあのホテルにいる。

Sは意を決すると立ち上がり、ホテルの入り口へ向かった。

Lのことだから監視カメラは張り巡らしているはずね。

………こそこそ入っても、意味はない。それにLがどの部屋にいるのか分からない……

なら、真正面から入るのみ。

Sはそう考えるとホテルの玄関へ堂々と入っていった。

「竜崎」

一方、Lのいる部屋では、Lとワタリが複数あるテレビを見ていた。

「……………」

Lはそのテレビの一つを眺めていた。

そのテレビには、ホテルに堂々としてきたSが映っていた。

「竜崎……………」

ワタリがL 竜崎というのはLの別名なのだろう に心配そう
に呼びかけた。

「……………」

Lは人差し指の爪を噛みながら黙ったまま手元にあったスイッチを入れた。

「誰だ？おまえは」

『誰だ？おまえは』

ホテルのロビーに入った途端、Sの頭上から機械の合成音がした。

Sは上を見上げ、監視カメラを見つけた。

Sは不敵に笑った。

「こんにちわ、…し。貴方に会いに来たわ。」

Sは監視カメラに向かってそう言った。

『……S、か？』

「あら、書き込みを見てくれたのね。……その通りよ。私はS。」

Sは思惑通り、という風に笑った。

『……今迎えの者がそっちに行く。』

その時、ロビーのエレベーターから黒ずくめの人が見えた。

黒ずくめはゆっくり歩いてSに近づいた。

「案内します。」

黒ずくめは丁寧にそう言ってエレベーターを指した。

「ありがとっ、……ワタリさん？」

「ワタリです。呼び捨てで構いません。」

「そう」

Sはそう言つとエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターが小さな振動をして上へ動き始めた。

その間、Sとワタリはずっと黙つたままだつた。

しばらくするとエレベーターが止まり、ドアが開いた。

ワタリが先を歩き、Sはその後についていった。

するとある一つの部屋の前に着いた。

ワタリは中に、とドアを指し示してSを促した。Sは微かに頷き、ドアを開けた。

中は豪華な内装が施されており、Sのマンションとたいして変わらなかった。

その部屋の奥にこれまた豪華な机と椅子が並んでおり、その椅子の一つに一人の男性　Lが体育座りで座っていた。

Sは初め、LのLらしくない容貌に微かに目を見開いたがすぐに不敵な笑みを浮かべ、Lに近づいた。

「……初めまして、L。」

Sがそう言つとずっと紅茶のカップをかき混ぜていたLがそのぎょろりとした目をSに向けた。

「…初めまして。」

Lは紅茶を机に置き、何かを探るような目つきでSを見た。

「…綺麗な人ですね。」

Lはニツと口をつり上げて人差し指の爪を噛んだ。

Sはまさかそう言うことをいわれるとは思っていなかったらしく、目をパチクリとさせた。

「……ご冗談が上手ですね。」

「いえ、本心です。貴方は綺麗です。」

Sはカツと頬を赤く染めた。こういうことには慣れていないのだろう。しかし、それでも平常心を保とうと口を開いた。

「私はSです。書き込みを見ていただいたようなので分かると思いますが、私は貴方に賛同する人間であり、反対する人間でもありません。」

Sは落ち着きを取り戻したように一息ついた。
するとLが口を開いた。

「……私がLと信じているんですか？」

Sはふっと笑った。

「Lじゃなかったら殺すまでです。」

……私はSですが、別にシェリーという名前もあるんですよ。」

Sはぶかぶかのシャツの袖を口に持って行って、噛みながら笑った。
まるで殺したいという衝動を我慢しているかのように。

LはそんなSをじっと見つめた。

「……シェリー

……殺し屋、ですか。ですが……今の貴方は武器を持ってないようですが。」

「……ふふふっ！」

SはLの言葉にさらに愉快そうに袖を噛みながら笑った。

そして、消えた。

「!?!」

Lは驚愕の表情を浮かべた。

先ほどまでLの5メートル先にいたSがいつの間にかLの背後におり、Lの首を絞めるように手をかけていた。

「殺しに道具なんていらないわ。私は“シェリー”……

“人間失格”と言われているのよ。」

Sは愉快そうにLの首から手をはずし、そのままLを背後から抱きしめるようにLにもたれ掛かった。

「私はいつでも貴方を殺せる。

……もし、貴方がLじゃないと判断したらすぐに殺すわ。」

「……………」

Lは首をゆっくり動かし、自分の真横にあるSの顔を見つめた。
そして、

チュッ

LはそのままSの頬に軽いキスをした。

Sはしばらくの間ぱちくりとするとガバツとLから離れた。
そして顔を真っ赤にしてわなわなと震え始めた。

「……………貴方本当にシエリーですか？隙がありませんよ……………」

Ｌはさも愉快そうに人差し指の爪を噛んだ。

ＳはＬをギリッと睨み付けた。

「わ…悪かったわね！こちらとら４歳の時から殺し屋やってるのよ！
貴方のように異性慣れはしてないのよ！」

ＬはＳの言葉に目を大きくして驚いた。

「４歳？それはすごいですね。」

「な…論点をずらさないでよ！」

Ｓは怒鳴った。

「……とりあえず座って話ませんか？

後、私は異性慣れなんてしてません。貴方が鈍いだけです。」

Ｓはまだ何か言いたそうな顔をしていたが、諦めて椅子に座った。

「紅茶をどうぞ。」

Ｌが紅茶を新たなカップに入れてＳに差し出した。

「ありがとう…っ」

Ｓは紅茶を一口口に含んだ。そして、停止した。

「……………」

「どうしました？」

「……………」

Sは紅茶の入ったカップを口から離して机に置いた。

「……S？」

Lは心配そうにSの顔をのぞき込んだ。

その時、どこからかワタリが現れてSに水を差しだした。

Sは無言で水を受け取ってゴクゴク飲み始めた。

「……………っはぁ！」

Sは水を全部飲み干すと苦しそうにゼイゼイ息をしながらLを睨んだ。

「なんなのよ！？この砂糖の塊は！？」

どうやらLが紅茶に淹れた砂糖の量が多かったらしい。

そう言えばSが飲んだ紅茶は砂糖が余りにも多すぎて砂糖が水を吸

って紅茶がなくなつて粉になつてた。

それに気づかないSもSだが……

Lは首を傾げてSを見た。

「これくらい普通だと思いますが。」

「……………」

Sは頭を抱えた。

Lってこんな変人だったわけ！？

「S?」

「あー……いえ、そろそろ本題に入りましょうか……………」

Sはぐつたりと笑った。

SはLをじつと見つめた。

「……L、書き込みにもあったとおり私は貴方の味方でもあれば敵でもある。」

「……………」

「私はMDSの元で殺し屋稼業をしていた。」

「MDSですか……」

「ええ。4歳の時に……まあ、いいわ。とにかく私はMDSの一員だった。でも、」

「キラに殺された」

「ええ。上層部がキラに殺された。そのおかげで私は自由になったわ。でも、やることがないのよね。ずっと殺し屋だったから……だから、貴方やキラの対決に興味を示したのよね。貴方たちならこの退屈な世界を面白くさせるほどの戦いを見せてくれると思ったの。」

Lは訝しげな顔をした。

「キラの殺人が面白いと？」

「ふふつ。私は悪は滅ぶべきだと思ってるし、命は大切にすべきだとも思ってる。…でも、どっちが正しいかなんて分からない。…だから」

Sは愉快そうに口をつり上げた。

「貴方たちの対決を見せてもらうのよ。Lが勝つか…キラが勝つか…面白そうでしょ？」

「面白くありません。それに絶対私が勝ちます。」

Lは拗ねたように角砂糖を口の中に放り込んだ。

「……で、Sは何故ここに来たんですか？」

「私はこの目で貴方たちの対決を見たいの。……貴方たちを助けてあげたいとも思ってるわ。もちろんLとキラ、平等にだけねど。」

「助けは要りません。」

Lは角砂糖を積み木のように積み上げ始めた。

「私はキラに賛同するような人間の助けは要りません。SはSで自由どうぞ。」

「そんなこと言っちゃったらキラ側についてちゃっけど？」

LはちらりとSを見た。

「自由に。」

SはLの答えに愉快そうに肩を震わせた。

「そう言うと思ったわ。L、貴方はやはり私が思ったとおりの人間だわ。…気に入ったわ。」

「……やっぱり貴方の側にいてキラとの対決を見たいわ。」

Lは眉を潜めてSを見た。

「私は貴方やキラ、それぞれの味方であり、敵でもある。…そう言ったわよね？変更するわ。キラとの決着がつくまで貴方の味方でいてあげる。」

「……元々私は殺し屋だからキラに命を狙われる立場だしね。」

Lはため息をついた。

「ありがとうございます、でも、要りません。」

「私は結構役に立つわよ？殺し屋なだけじゃなくてスパイ活動もしてきたし。」

「それに…私を離しておかない方がいいわよ？」

Lは角砂糖を一個口に含んだ。

「…私を放って置いたら…貴方のパートナーが危ないかもよ？」

「……………」

「脅すように悪いけれどね……
私を放って置いたらキルシュ・ワイミールさん……ワタリが危ないかもよ?」

Ｌは目を見開いた。

今、この場にはワタリはいなかったがおそらくどこかで二人を監視しているだろうから驚いているだろう。

「……」

「ああ、『誰です?それ』とか『ご自由に、私やワタリは影武者ですから』とかはナシね。

……私をあまり舐めない方がいいわよ?」

Ｓは酷く歪んだ笑顔を見せた。

「……何がしたいんですか」

「ん?だからー、私も貴方の助手?というか部下にして欲しいのよ。そして一緒に捜査したいの!そうすればキラとの対決がこの目で見るし!」

Ｌはため息をついて足下を見つめた。

Ｓは楽しそうにＬを見つめている。

「……分かりました。貴方には何を言っても無駄なようですし。」

「ふふつ。…そうと決まったらよろしくね、Ｌ。」

「私のことはしでなく竜崎と呼んでください。用心のためです。」

「分かったわ。私は……Sのままでいいか。」

Lは不機嫌そうに積み上げた角砂糖を崩した。

Sがどんな話を進めていったことが気に入らないのだろう。SはそんなLを見て苦笑した。

「ごめんなさいね。突然押し掛けちゃって。」

……私のいた組織を潰したキラとそれを追うL……それを知った途端に好奇心が抑えられなくなってるね。」

「いえ、別に構いません……」

「ふふ、構う！という顔をしているわよ？」

……竜崎、貴方は本当の名前があるのよね？」

Lは首を傾げた。

「確かにありますが、それが何か？」

「そう、……って、気になったんだけど……貴方、私がキラだと疑わないの？」

Lはニツと子供のように口をつり上げた。

「貴方はキラではありません。……アホすぎますから」

「……………」

Sは一瞬何を言われたのか分からずぱかんとした。

「ほら、ア水面」

「……………！」

Sは顔をひきつらせてぶるぶる体を震わせた。

「まあ、それは冗談だとして……本物のキラは狡猾で、殺人をもの
ともしていません。…S、貴方は少なからず自分が人を殺している
と自覚している。」

キラならば殺人とは自覚していないはずです。」

Sは真剣な瞳で話すしを見つめた。

「貴方はキラではありません。……まあ、キラである確率は0・2
%つてところでしょう。」

…ところで、何故名前の話を？」

「ああ……私ね、自分の名前を知らないのよ。知らないと言っより
も…『忘れて』しまったの。」

……まあ、ともかく…私の推測なんだけれどね、キラの殺人には顔、そして名前が必要なんじゃないかって思うの。」

LはSの話に興味を示した風にずっと身を乗り出した。

「Sの名前についても興味はありますが…それよりキラの殺人についてです。」

「ん、私はこのとおり殺し屋稼業だから裏社会で殺しについての情報が入ってくるのよ。その中に一つ、興味があるものがあつたの。10年前になるんだけど……ある一人の殺し屋がこう言ったらいいのよ。」

『俺は顔と名前だけで人が殺せる。』と…」

Lは目を見開いて爪を噛んだ。

「残念ながら、それ以上は知らないわ。その殺し屋、すぐに死んじやったみたいだから。」

Sは肩をすくめた。

「……そうですか…でも、いい情報をもらいました。」

Lは嬉しそうに口をつり上げた。

SはLのその子供みたいな仕草に微笑んだ。

「ではS…部屋は一応こちらで用意します。……が、あまり外には出ていただきたくありません。」

「分かっているわ、竜崎。一度家に帰ってまたここに来るわ。」

Lは頷いた。

「……これからよろしくお願いします。」

「ええ、よろしく。」

こうしてここに、LとSのコンビが現れた。

『キラの決着が付くまでLの味方』になったS。

果たして、本当にLの味方なのだろうか

そして、自分の名前を『忘れて』しまったSの過去には一体何があったのだろうか

Sはしに用意してもらった部屋にいた。
シャワーを浴びたのかバスローブを着ており、窓から夜景を眺めている。

やっと、殺しの生活から離れられる…
18年…長かった…

Sは嬉しそうに、しかし哀しそうに微笑んだ。

コンコン

その時Sの部屋のドアからノック音がした。Sはドアを振り返った。

「竜崎です。入ってもよろしいでしょうか。」

「はい。どうぞ。」

Sはしを中に促し、共にソファーに向かい合わせになって座った。

「……………」

ＬがじつとＳを見つめている。

Ｓは訝しげな顔をした。

「竜崎？」

「あ、いえ、…風呂上がりだったんですね。」

Ｓはそういえばバスローブを着たままだし、髪もつつすらと濡れていたな、と自分の髪を触った。

「欲情したの？変態」

Ｓはクスクス笑いながら口に手をやった。

「はい。欲情しました。」

ＬはニヤリとしてＳを見つめる。

「……変態」

Ｓは嫌な顔をしてＬを睨んだ。

「まあ、それはさておき、Ｓに聞きたいことがあるんです。」

Sは真剣な表情になってLを見つめた。

「……と、その前に、Sは4歳の頃からシェリーと名乗って殺し屋をやっていたんですね？」

Sは一瞬、本当に一瞬哀しそうな顔をした。

「……ええ」

Sは無理矢理微笑んだ。

「……これまでに政府の要人などが謎の凶器によって暗殺されます。……シェリーですか？」

Sは頷いた。

「……私は武器なんて使わなくても素手で一瞬で相手を殺せるから……」

「そうですか。……4歳の時にもうすでにそれができたんですか？」

Sは一瞬、昔を思い出した。

どこかの寂れた村

泣き叫ぶ村人

笑い声をあげる男の人たち

私を必死で庇おうとしている男の子

目の前で倒れている女の人と男の人

「……………いいえ。昔のことはほとんど覚えていないんだけど……………私はどこかの村にいたらしくて……………MDSがその村を襲ったのよ。

どうしてだったかは覚えてないけど

まあ、とにかく、村が襲われてみんな次々と死んでいった。そんな中、私だけは何故かMDSに目を付けられて、連れていかれて……………殺し屋になるための特訓を受けたのよ。

初めは銃やナイフを使ってたけど、そのうち自分で自分の技を編み出すようになったのよ。

……………私は何も覚えてないの。自分の家族も、自分の誕生日も、自分の名前すらも……………」

Sは哀しそうに自嘲した。Lは黙ったままSを見つめている。

Sは上を見上げた。

私は…

私は……誰なんだろう

「S」

SはLを見た。Lはにこつと笑った。

「大丈夫ですよ。貴方は強くて、頭が良くて、綺麗で、素晴らしい人だけどアホで、ドジで、鈍い。」

……それが貴方です。名前や誕生日は覚えてなくても、貴方はここにいます。」

Sはポカンとした。Lはニツと笑った。

私は……ここにいる

Sはしばらくの間Lの言葉を頭の中で繰り返した。そして、ゆっくりと微笑んだ。

「……ありがとう。ちょっとムカついたけど。」

「どういたしまして。」

SはLの言葉でずいぶん心が軽くなったようで、優しい微笑みを浮かべていた。

「……それで、聞きたいことって？」

「ああ、忘れてました。S、貴方はどうやってこのことを知ったんですか？」

「ああ、それね。

今、キラ事件は警察の情報が漏れているわよね？キラは警察のネットワークを使って様々な実験をしている。

…このことから、L…竜崎はまず警察関係者を疑うだろうと思ったの。でも、この事件は竜崎一人じゃあきつい。だから、本当に信頼できる人間を選ぶために警視庁のすぐ近くにいろんと思うたの。そして、あとはワタリをキーワードに探った。

…ほとんど賭に近かったんだけどね。」

Lは嬉しそうに笑った。

「S、やはり貴方は賢いです。」

「当然でしょ？」

Sは誉められたことが嬉しいのか、にんまりと笑った。Lは真面目な顔をしてSにこう言った。

「でもアホです。」

「……………」

Sは途端に嫌な顔をする。

「ほら、アホ面」

「……………」

Sはますます嫌な顔をしてLを睨みつける。
Lはクックツと笑うと立ち上がった。

「それでは。」

嫌な顔をしているSを残してLは去っていった。

「竜崎……」

「Lが自分の部屋に戻るとワタリが嬉しそうな顔をして話しかけてきた。」

「どうした？ワタリ」

「Sさんを大層気に入られたようですね。」

ワタリは孫に嫁が出来たと聞いて喜ぶおじいちゃんという顔をしていた。Lはボリボリと頭を掻いた。

「……何ででしょうね。あのアホと話すのが楽しいんです。」

Lはそう言って笑うと椅子に座って紅茶を淹れて飲み始めた。

真っ暗な、何もない闇の中

一人の、少女がそこに立っていた。

年は4歳くらいだろうか、漆黒のショートヘアに泥で汚れて薄茶色になってしまった肌、ボロボロになってしまった着物、血で滲んだ足、そして、全てに絶望した瞳…

その少女はただ立っているだけで、何かをしようとしていない。

何をしても無駄だと少女の瞳が語っている。

全てを諦めきってしまっている。

この子は、誰？

私？

Sは、そこで目が覚めた。

「……変な夢」

「何がですか？」

「うおわぁあっ！？」

Sは突然した声に奇声を上げてベッドから飛び降りた。

「色気のない叫び声ですね。」

しが、Sの部屋のSが眠っていたベッドに寝っ転がっていた。さも自分のベッドです、というかのように。

Sは目眩を覚えた。この男は一体何をやっているのか…

「竜崎…何故ここに？」

「何故って、Sがなかなか起きてこないから迎えに来たんです。」

Sは頭痛もしてきたらしく、頭を押さえていた。

「それならもつと普通に起こしてくださらないかしら？」

Lは眉を潜めた。

「それでは王子様のキスとかをすればよかったんですか？」

「は…！？ち、違…」

Sは慌てて顔をブルンブルンと横に振る。

「それでは明日からそうします。」

「はあ！？いや、しなくていい…」

「ワタリが朝食を用意しましたから私の部屋に来てください。」

「人の話を聞け！」

Lはぶらぶら手を振りながらSの部屋から去っていった。

Sはぐつたりと脱力した。

あれが本当に世界一の探偵なの！？

ただの変態じゃねえか！

Sは諦めたような乾いた笑いを浮かべながら顔を洗いに洗面室に行

った。

しばらくかした時、SがLの部屋に現れた。

Lはすでに椅子に座っており、机には豪華な洋風の朝食が乗っていた。

「わーお、豪華。」

Sは驚いた風に机の上の朝食を眺めた。

「ワタリが用意してくれました。」

「へえ。ワタリって、料理も出来るのね。」

Sは感心した風に言いながらLの向かいに座った。

「Sは料理が出来ないんですか？」

「ポイズンクッキングなら得意よ」

Sはさらりとそう言った。あまりにもさらりと言ったのけたためにLは変な顔をしてSを見つめた。

「……ジョークよ」

「面白くないです」

Lは眉を潜めて机の上から菓子パンを取った。Sも苦笑しながらサンドイッチを手に取る。

「んで、竜崎……これからどうするつもりなの？」

Sはサンドイッチをムシヤムシヤ頬張りながらLに尋ねた。

「どうすると思います？」

「……警察の中を探る……だけど、それはもうとつくにやってるんでしょ？……FBIあたりを使って。」

LはSの言葉にニツと笑った。

「鋭いですね。」

「長年殺し屋をやっているからね、何となく察しがつくのよね。」

「Sの言うとおり、FBIを日本に入らせて捜査させています。」

Lは菓子パンのチョコレートの部分を舐めながらそう言った。

「……竜崎、ご機嫌なところ悪いけれど……」

Sは口をつり上げた。

「そのFBI、死ぬでしょうね」

Sの言葉にLは眉を寄せ、目を見開いた。

Sは冷めた瞳でLを見つめながら微笑んでいた。

「……何故……」

『竜崎！』

LがSに問いただそうとした瞬間、ワタリからの通信が入った。
Lは嫌な予感がしながらも通信のボタンを入れた。

『L……日本から捜査官が死亡したとの知らせが入った』

そんな言葉がSの耳に入ってきた。

やはりね。

Sはため息をつきながら紅茶を啜った。

しばらくするとLと相手の会話が終わったらしく、LがSの方に向き直った。

「何故分かったんですか」

LはSを睨みつけるように見た。

「…FBIが自分を調べていると分かったら殺すでしょ?」

Sは冷静にそう言った。

「忘れないで。私は元殺し屋のシェリーよ。殺す側の心理くらいすぐに掴めるわ。殺す側の人間ってのはね、周りに敏感なのよ。自分

が調べられていることくらいすぐに分かったでしょうね。
ましてやキラは世界一の探偵と名高いＬと渡り合うほどの頭脳を持つ。

……たかがＦＢＩ、すぐに始末できたでしょうよ。」

Ｓは嘲るようにそう言った。

「……………」

Ｌは何も言おうとせず、ただＳを睨みただけだった。

「今回はキラの勝ちね。」

Ｓはニヤリと口をつり上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9406c/>

DEATH NOTE ~parallel world~

2010年10月10日18時04分発行